

授業概要

中世から近世にかけてのヨーロッパにおける文書社会の発展を書物というメディアの観点から学ぶ。論証形式や簿記など、中世に生み出され、現代でも使用されている文書スタイルは多い。そこで授業内では具体例として年代記や文学作品、証書、裁判記録などさまざまな種類の文書を取り上げ、その記述内容に加え、背景にある社会文化についても考察できるように講義する。作成者はなぜ特定の形式を採用したのか、それによって何を伝えようとしていたのか、読者は実際には何を読み取ったのか、一つの文書の読み方は時代によって変わるのか。これらの点を問うことで、文書というメディアの機能が社会とともに発展したことを理解し、現代社会における文書の役割を批判的に検証する。

授業計画

第 1 回	ガイダンス：中世における言語とメディア
第 2 回	物質としての写本
第 3 回	中世①：正統性と正当性の保証
第 4 回	中世②：修道院と証書
第 5 回	中世③：托鉢修道会と司牧文書
第 6 回	中世④：列聖審問制度と奇蹟録
第 7 回	中世⑤：聖人伝が描く政治と宗教
第 8 回	中世⑥：幻視文学と地域社会
第 9 回	中世⑦：医学の発展と医学書
第 10 回	中世⑧：経済活動と文書
第 11 回	中世⑨：異端と異端審問
第 12 回	中世⑩：「限界リテラシー」とは何か
第 13 回	中世⑪：聖書の変遷
第 14 回	近世①：印刷術の時代
第 15 回	近世②：新しい情報社会
第 16 回	筆記試験

到達目標

- 多様な文書形態についてその成立と機能を教養の一環として理解し、適切な判断に基づいて文書形式や様式を使い分ける知識を身につけることができる。
- 専門知識を土台に思想的展開とその現実社会への影響を論理的に記述することができる。
- 文書をメディアの一環として理解し、文化や社会を読み解く力を創造的に用いて人間の営みについて考察できる。

履修上の注意

高校レベルの世界史の知識を持っていることを前提として授業を進めるため、「西洋史概説」を履修済みであることが望ましい。また、授業内課題であるリアクション・ペーパーは必ず提出すること。

予習・復習

授業中に示すキーワードについては事前に下調べを行い、授業終了後は紹介した史料の見直しを行うこと。リアクション・ペーパーにあった質問は次週にフィードバックを行うため、その内容についても復習し、わからない箇所についてはできるだけ早く質問すること。

評価方法

試験と課題を総合的に評価する。割合は筆記試験 80%、リアクション・ペーパー 20%とする。

テキスト

特に指定しない。参考文献については、適宜授業時間内に紹介する。